
俺達が生きる理由。

玉椿 寿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺達が生きる理由。

【Nコード】

N8840Y

【作者名】

玉椿 寿

【あらすじ】

俺とあいつの、凸凹生活。

プロローグ

その日は、いつもと変わらない日だった。いや、訂正。変わらない日になるはずだった。そんなこと言ったらあいつは絶対言うだろう。『いつもっていつのことだい？毎日全く同じ日なんてありえないことじゃないか。そうだろう？君は昨日と同じ時間に起きて、まったく同じ歩幅で歩いて、同じ心拍数で、同じ発音で会話して、同じ回数瞬きをするというのかい』と。しゃべり出したら止まらないんだ、あいつは。でも自分からしゃべりだすことはほとんどないから、下手したら1日中しゃべらない日だってあるだろう。そしてしゃべりきった後は必ずこういうんだ。『君は本当にバカだね、』と。

プロローグ（後書き）

頑張って書きまーす

凸凹生活？

俺は起きた。直感した。6時だ、と。6時に起きる夢をかなえたんだ！と。

自信満々で時計を見る。きっちり30分遅れた時計を。その時計は無邪気に8のところを指していた。

「…。30分遅れているんだから、今は8時半か。」

言ってみたものの実感はなかった。俺の頭の中では6時に起きたことになっている。

一分ほどしてやっと状況を理解した。

「は、はちじはんくく！？」

あわてて着替えて家を出る。

こういうとき女子だと用意が色々あって大変だが、男子は楽だ。

学校が始まるのは八時三十五分。俺の足なら余裕で着ける。よしっ…と思った時、空から声がふってきた。

「おい、バカにもほどがあるだろ。」

え？

聞きなれた声だった。俺はこの声をいやっちゅうほど知っている。しかし…空？

変だと思いながらも空を見上げた。バカバカしいほどに美しい空を。

——何もなかった。

「こっちだよ」

今度は後ろからその声が聞こえた。

走る足を止めて後ろを見る。

見慣れた顔があった。

「ハルヒト…。」

空から降ってきた声の主を、俺は知っている。そして、こいつの性

格が俺の性格と真反対だってことも。

「君は何をあわてているんだい？今日は土曜日じゃないか。」

そして、こいつは俺の兄弟だってことも——。

電柱のお兄さん。

ハルヒトは、いつもより百倍くらい馬鹿にした口調で言った。

「まぬけにもほどがあるよ。あのすずめすら曜日くらいわかってるだろうに全く君はなんでそう…（以下省略）」

俺は、頑張って走った道をハルヒトの愚痴を聞きながら歩いた。今回は、自分でも思う。まぬけだ。

にしても：何でハルヒトの声が空から聞こえてきたんだ？謎だ。

「僕は電柱の上から君のまぬけヅラを見学してたのさ。」

ハルヒトがまるで俺の心を読んだかのようなタイミングで言った。

いや、まて。いまサラッとすげえこと言ったよな？『電柱の上から』とか。

ハルヒトもよほどの変人だ。こいつと兄弟なんだ、と実感したことは一度もない。

俺ですら電柱の上なんか登らないし。

「こんなまぬけと兄弟だなんて：僕は宇宙一不幸な人間だ！！」
と言っただけ息をつくハルヒト。と、というか宇宙って規模大きいなっ！

そんなことを話している間に家に着いた。早かった。

俺とハルヒトが住む家は、一軒家。普通の。

でも裏に空き地がある。俺はそこでいつもサッカーをしている

「ていうかハルヒト、いいかげん俺のこと君って呼ぶのやめろよ。名前ちゃんとあるんだし…」

俺が覚えている限りでハルヒトは、俺のことを名前で呼んだことがない。

「やだね。君に命令されるとか。」

俺らの家族構成。

ああそうそう言い忘れてた。

俺の名前は山口京介ってんだ。

ちなみに今年で高1。

そんでもって双子の兄、ハルヒトは山口春人って書く。

俺達にはあと一人、兄弟がいる。

妹のモミジ。 山口栞。

超黒髪ロングヘアの俺とハルヒトを足して2で割ったような感じ。
1コ下で、今年は受験生だ。

母さんと父さんは仕事でフランス。

ちなみに言うとなんか母さんはついて行っただけ。 俺らをこの窮屈な日

本に置いて。

ただのバカ親だと思う。

まあその分俺は自由に生きてるけど。

家のことはだいたい3人で回してやっている。

……ってもほとんどは栞と俺がやってるんだが。

ハルヒトは「長男の特権」とか言ってるのんきに本を読んでいることが多い。

俺もそうしたいところだが、栞一人にやらせるのは気が引ける。…
から自動的にやってしまう。

おかげでそこらへんの女子より料理は上手になった。
洗濯は、栞。

風呂掃除は俺。

ゴミ出しはハルヒト。

よく考えたら洗濯と風呂掃除は毎日あるが、ゴミ出しは週に2回じゃないか！！

こんな風に毎日平和に過ぎていく、はずだった――。

凸凹生活？

いつからだ、

ハルヒトはよく寝坊するようになった…。

と、言うか寝る時間が増えた。

毎日俺とハルヒトは2人して枕に起こされている。

にしてもあのハルヒトが…。

「はあ、ついに君と同類に…（以下省略）」

なんだかんだいったって俺達は仲がいい。

学校へはいつも一緒に行ってる。

帰るときは部活の終わる時間が違うから、一緒じゃないけど。

俺はサッカー部でハルヒトは天文部。

よく似あっていると思う、昔から俺はスポーツ系、ハルヒトは勉強系がずば抜けてよくできたから。

「にしても君の髪の毛は日に日に茶色くなっていくことないか？
う…そりゃあ染めてるから。

それに比べてハルヒトの髪は純黒だ。枕と似ている

「サッカー部は日焼けすんだよ、んで茶色くなるの。」

「…じゃあ同じサッカー部のサエキ君はどうなる？真っ黒じゃないか。」

サエキはハルヒトと同じクラスでサッカー部のエース。

スポーツも勉強も人並み以上にできる天才肌。

俺はどう頑張っても勉強は全くできない。

ハルヒトだって極度の運動音痴だ。

だから両方できるサエキはヒーローだった。

(まあサッカーは俺にはかなわないけど)

「……ちよつと染めてる。」

「校則違反じゃないか」

チっばれないように地味に染めていったんだけど……気づくか、普通。そんなころ、キンコンカンコン……とチャイムの音が聞こえた。

『あっ』

2人同時に真っ青になる。

やべえ遅刻っ

俺は走れば間に合うけど、ハルヒトは……。遅いから……。

「君は先に行けばいい。僕は遅刻なんて初めてだから怒られないし、」

あ、そう……。

「んじゃあお先」

ハルヒトを置いて俺は全力疾走で走った。

走った。走った……。

校舎の俺のクラスの奴らが窓から何か叫んでいた。

どうせ茶化してるだけだろうと思ったが、何か様子が違う。

顔が真っ青な奴らや、女子の叫び声、真顔で何か叫んでいる奴、山口と俺の名前を呼ぶやつら……

いや、違った。

正確には山口「ハルヒト」のほうの名前を呼んでいたのだ。

俺は反射的に今来た道を振り返る。

『君は先に行けばいい』

遠くなったハルヒトの体は、交差点の真ん中に横たわっていた――
|。

む な し い 嘘 。

信じられなかった。

けどさすが運動部、反射的に俺は走っていた。

「ハルヒトっ！！！」

このまま信号が、変われば、ハルヒトはっ：

しかし幸運なことに朝の交差点は車1台も見当たらなかった。
じゃあ、何故ハルヒトは倒れているんだ？

倒れているハルヒトに駆け寄って名前を呼ぶ。

「ハルヒトっ おい、ハルヒトっ」

びくりとも動かない。

息は、していた。

そこに保健の先生の佐藤先生と俺のクラスの奴らが来た。

ハルヒトのクラスの奴らもいる。

「先生…っ ハルヒトを…ハルヒトを…助けてくださいっ！！！！！」

今にも泣きそうな俺に、佐藤先生は言った。

「大丈夫よ、今救急車を呼んだから。大丈夫、軽い貧血よ」

最後のほうの声は小さくなっていた。

（嘘だ。）

そう思ったが、貧血だと信じたかったから何も言わなかった。

しかしその嘘はいとも簡単に崩れ去った。

記憶のカケラ。

俺は、静かな病室で一人ハルヒトの様子を見ていた。

今にも泣きそうな俺は、かすかに暖かいハルヒトの手のぬくもりで
かろうじて保っていた

ただ眠っているだけのように見える、ハルヒト。

実際そうなのだが、でも細かい意味では違った。

＊

担当の医者である駒井先生は言った。まだ若い、20代後半くらいの
男の医者だった。

「保護者の方は？」

「アメリカに行ってます…」

「そうかあ」

やけにのんきにしている駒井先生に俺は聞きたいことがたくさんあ
った。

その気持ちを読み取ったのか、駒井先生は「ああ」というと、ハル
ヒトについて話した

「春人君は、大丈夫だ。何も死ぬほどのことではない」

駒井先生は優しい笑顔で言った。

なぜか素直に信じられた。

「ただね、軽い記憶障害がおきて、いる」

「え？」

「いや、その昨日したことを覚えてないとか、食べた物を覚えてな
いとかその程度のことだけなんだがね」

記憶障害？…。

「でもこれだけは言っておく。春人君は大丈夫だ。しかし、周りの
人は、辛いだろう」

「どういう…ことですか？」

「春人君の記憶障害はこれからも進行していく、ってことだ。」
それじゃあ・・・ハルヒトは…。

「いずれ、キミの名前すら覚えていなくなる。」

＊

夕方になるころ、ハルヒトが目を覚ました。

「んっ…」

「ハルヒト…無理すんな」

「君に、命令されるのはやだね」

そういつて苦いものを食べたような顔をしてからバツが悪そうに笑った。

「心配をかけた。すまない」

「え？」

今、謝ったのか？

俺が覚えている限りでハルヒトが人に謝ったところを見たことがない。

「柩は？」

「あ、ああ・・・夜には母さんと父さんと一緒に来るよ。」

「そうか」

俺はいまだにハルヒトが記憶障害を負っているなんて信じれなかった。

いや、訂正。

信じたくなかったんだ…。

告白。

「嘘、ついてたんだ。すまない」
ハルヒトは言った。

「気づいてたのか、」

俺が少し驚いてハルヒトを見ると、呆れたように、笑っていた。

「自分の体のことくらいわかる。」

そりゃあそうだろうなあ

「だんだん、昨日のことや本当に昔のこと、そしてついには小学校で勉強したことすら覚えてられなくなったんだ。」

「…。」

日も暮れてすっかり暗くなった空を見てハルヒトは言った。

「僕はもう、何も覚えられない。覚えたことを忘れていくだけだ。」

殻———

ふとそんな言葉が浮かんだ。

ハルヒトは、殻になる。

「それでも、いいと思ったんだ。今まで十分生きてきたし。」

「何言ってる…」

俺の言葉をさえぎってハルヒトはしゃべる。いつもそうだ。

「でも、違った。僕は自分が思っていた以上に弱い人間だった」

そう言っただけハルヒトは、俺のほうを向いた。

ふと驚いた顔になっている。

「大丈夫だ、なにも死ぬわけじゃないんだから。」

ハルヒトはそう言ってベッドの上から俺の頭をなでた。

「な、何してる…」

「だから、泣くな。」

ハルヒトに言われてはじめて、俺は自分が泣いていたことに気がついた。

君は本当にバカだね、

その日は、家族5人で夜ごはんを食べた。
ハルヒトの病気は入院するほどの病気じゃなかったから。

「ハルちゃんも京ちゃんも大きくなったわねえ」

母さんに会うのは半年ぶりくらいだ。

「母さん、英語ペラペラになった？」

「それがねえ、向こうでも9割ジェスチャーで生活してきたのよおっおほほ・・・」

母さんは、俺ら家族の中で飛びぬけて明るい。

そんな母さんを見て父さんはにっこりしている。

そして母さんはハルヒトを見て言った、

「ハルちゃん、これからはお母さんたちも一緒に暮らすから。」

優しい声だった。

「別にかまわないが」

枕は目が真っ赤だった。

俺もだった。

あの後病室で大泣きした僕は、俺よりハルヒトのほうがよほど大人だなあ、と思った。

そして俺が泣き終わった後には頭をくしゃくしゃとなでて『君は本当にバカだね』と言ったんだ

『僕のために泣くなんて、馬鹿だ』と

天体観測。

5人で食べたご飯は美味しかった。

ハルヒトの病気がなければ最高だったのに

その夜、ハルヒトは屋根の上にいた。

電柱に登るくらいだ、前もこうやって屋根の上に来ていたのだろう。

「ハルヒト」

後ろから呼ぶとハルヒトがはっとなって振り返った。

「なんだ、キミか」
ちっ

毒舌だけは忘れないようだな、こいつは。

そう思いながらも俺は座っているハルヒトの横に立った。

「オリオン座」

ふとハルヒトが言った。

夜の町は静かすぎるくらいで、小さなハルヒトの声でも聞こえた。

「あれ、オリオン座」

そういつて指をさす。

俺には星がたくさんありすぎてわからない。

必死に探す俺を見て、ハルヒトはくすくすと笑った。

「人間はさ、昔でできなかったことを成し遂げるために生まれてくるんだ。誰もが、絶対。」

始まった。ハルヒト論。

「そしてまた悔いを残して死んでいく。」

俺は黙って聞いていた。

オリオン座はいまだ見つからない

「こうやって星を見てるとき、気分が落ち着かないかい？」

「ああ・・・」

じめじめとする、夜に

俺らは屋根の上で2人星を見ていた。

きつとハルヒトにはオリオン座のほかにも星が見えているのだろう。

「僕はさ、この星を君に見せるために生きてきたんだ」
何を。

もう悔いはないというような言い方をするな。

「だから君も・・・」

俺はそこで我慢できなくなってどなった。

「黙れっ」

静かすぎる夜にその声は響いていた。

「もう、わかったから。星のすごいところ。だから・・・」

それまでじつと俺の顔を見上げていたハルヒトはふつと嘲笑気味に笑って言った。

「そうだな、わかってもらえればそれで十分だ」

ハルヒトはきつと、忘れてしまわないうちに言っておこうと思ったんだ。

自分が生まれてきた理由を。

あまりにも悲しすぎる理由だった。

秋の風、君のこと。

もう、秋の風が吹いてきた。

あれから、確実にハルヒトは記憶を失っていた、学校は、授業について行けない、と退学した。

しかし本人いわく星のことだけは覚えているらしい、星のことは最後まで覚えてられたらしいな、と言っていた。

俺はというと、家事は母さんがやってくれるし、ハルヒトの毒舌もあまり聞かなくなつて、心に穴が開いた感じた。柩は受験に向かって頑張っている。

その心の穴を埋めるために俺は今まで以上にサッカーに没頭した。休日はずと行っていいほど家の裏の空き地に行き、ボールをけた。

そしてその様子をハルヒトが見る、という過ごし方が定番になっていた。

ハルヒトはもう、俺がやっているスポーツの名前もわからない。自分の年はもちろん、名前すらも覚えてないんじゃないだろうか。

でも、星は必ず見ていた。

夜、毎日。

それが唯一の楽しみだったようだ。

そして俺も付き添っているうちにだいたい分かるようになっていた。少なくとも、オリオン座がとも見つけやすい星だったということのはわかった。

そう、彼がほぼ1日中眠るようになるまでは…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8840y/>

俺達が生きる理由。

2011年11月27日09時45分発行